
碧の国

智恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧の国

【Zコード】

Z0127D

【作者名】

智恵子

【あらすじ】

赤の他人の死んだ一人がすべて碧の色彩を持つ世界によみがえり、前世を思い出しながら世界を守ろうとするお話です。

第一章 突然の生か死か（前書き）

暗黒を生みし魔の山の麓に
黒き国ありて世界を守護したり
碧き聖なる光生みし海を包むように
碧き国ありて世界を照らしたり

碧・それは聖なる光

世界を構成する色彩

碧濃くなりて黒に蝕まれる時
黄金の王 黄金の女王誕生し
碧き五人の戦士とともに戦わん
黒き者封印し

聖なる碧き光取り戻さん

第一章 突然の生か死か

閑静な住宅街は平穏な朝を向かえる。朝日が連なる屋根を照らし、街は美しく輝き始めた。

「母さん、カバン取つて。ありがとうございます」

「はいはい、もう高校一年生になるんだから、しゃきっとしなさいよ。いつてらっしゃい」

どこの家庭でも交わされるような、平凡な会話だが、その家の玄関から響いた声は、平凡に思われない澄んだ美しい声だった。

その声の主は勢いよく開かれた玄関の扉から、金の髪をなびかせて現れた。扉の奥にいる母親は純粋な日本人だが、その娘は国籍のない不思議な顔立ちだった。一目でハーフであるうと予測はつくが、髪の金、瞳の琥珀はハーフと言では済まされない美しさと、神秘を表していた。波打つ金の髪を腰までのばし、セーラー服姿でさつそうと歩く姿は人目を引いていたが、彼女は意識することなく自然に歩いていた。

「摩理」

道路を隔てて彼女を呼ぶ声は、車の走行音でかき消された。

呼ぶ声に気付かない摩理は、振り向くこともなく歩き続けた。再び横断歩道付近で彼女を呼ぶ声があり、そして彼女に届いた。

摩理は慣れ親しんだ友達の声だと判断し、道路側に振り向いた。しかし摩理の瞳に、自分を呼ぶ友達の姿ではなく、横断歩道の上での子供が車にひかれそうになる光景が飛び込んできた。

激しいブレーキ音と、子どもの叫び声が一瞬にしてあたりを緊張させた。

「危ない！」

摩理は叫び、次の瞬間には声も出ない事態へと、時は流れた。

摩理の眼前に映し出される風景は、泣きじゃくる子供。泣き叫ぶ友人。そして、金の髪を深紅の血で染める女の子の姿。それは紛れ

もなく、摩理の自分自身の姿だった。摩理は、自分の血に染まつた姿を遠くで見ていたのだ。

信じられない展開を、ただ呆然と立ちすくみ、見つめた。自分を包み込む碧い霧の存在も知らず、彼女の意識は遠くなつた。

同時に、もう一人平穏な朝を迎えるはずの男の子がいた。肩を少しそぎる真っ直ぐな髪が、朝日に照らされ黄金に輝いていた。

豪奢なフランスベッドの中から、差し込む光を眩しそうに見やつた。

富殿を連想させるような部屋のドアから、ノックが聞こえた。

「どうぞ」

少し高いがかされた優しげな声が、ドアを開かせた。

「お坊っちゃん、朝でござりますよ。早く起きて下さい」

優しそうな老女が、彼の寝床に朝食を持って入ってきた。

「ああ、よく寝たよ。前から言つていいけれど…ばあや、いいかげんに、そのお坊っちゃんといつのは止めてくれないかい？」

眠そうにベッドから起きあがる男…と言つては、まだ幼い。青年とも、少年とも呼べない、碧い瞳の持ち主は老女に向かつて言つた。
「そうでござりますねえ。もつエミリアン様も子爵様となられて、お父さまのバサレット公爵家を継ぐ身分ですものねえ。ああ、お坊っちゃん、乗馬するのでしたら、気をつけに行って下さいね」

結局、お坊っちゃんまと呼びつづける老女を、優しい瞳と溜息で見送り、朝食を食べる。

朝食をすませた彼は、習慣となつてゐる乗馬に向かつた。

「どうぞ、今日もいい艶だ」

愛馬にまたがり、いつものように駆け出す。休憩する泉のほとりまで、後もつしまで來た。

「よし、とばすぞ！」

愛馬に声をかけ、勢いよく走り出した瞬間に事は起きた。

馬の悲痛な鳴き声とともに、エミリアンの体は宙に浮いた。

気がついたときには、愛馬が血塗れになつてゐる自分を嘗めていた姿が映つた。事態を把握できないエミリアンを、碧い霧が包む。だんだん意識が薄れてゆき、自分の姿が見えなくなつたとき、彼は意識を手放した。

碧い光。碧い海。碧い空。

すべてが碧で構成された世界が、ここに存在していた。

空に太陽はなく、海が碧い光を生み出し、世界を照らしていた。夜とも昼ともいえない優しい光の中、世界は平和を保つていた。

碧い町並み。この世界で一番碧く光る町、スレイダ。聖なる碧き光を受ける、この美しい町は、支配する者もなく、清き心で町は栄えた。

神官と裁判官が軍隊を制し、町の秩序は保たれ、永遠にその容貌を変えることなく存在するかのように思われた。ただ、時だけが変化しているかのようだった。

しかし、この町にも変化は訪れる。この碧の中心部にも黒き存在が現れ始めたのだ。人々を不安にさせる黒き存在。今は伝説となつた黒き国。魔の山も麓に君臨し、魔から、闇から世界を守つたとい伝えられている、黒き民。その黒き民は闇に犯され封印されたといふ、黒。

しかし、人々は待つっていた。黒を封印した黄金の王と女王の復活する時を彼らは待つっていたのだ。

黒の国と並び称される、碧の国を統治した黄金の一人を。そして、黄金の一人に使える碧き五人の戦士を待つていた。

碧い光が差し込む簡素な部屋に、碧と言つより黒に近い程、深い碧い髪を持つ男が、一人たたずんでいた。精悍な体躯と頭の良さそうな面立ち。冷ややかではあるが、慈愛のあふれた灰色の瞳。男は氷の彫刻のように、身動きもせずに窓の外を見ていた。

この町の若き裁判官長であるブレインの姿である。仕事を終えた

彼は、自宅の一階から人々を見おろしていた。

「ピュア、来てごらん」

低い声が部屋に振り返ったブレインの口から発せられる。しばらくすると、淡い綺麗な碧い髪を肩までのばした少女が入ってきた。

「なあに、兄さん」

「ほら、見てごらん」

優しく、小さな少女を窓辺に誘導する。

「フォース、フォースだわ！」

兄の指さす方向をみて、ピュアは一人のたくましい男を見つけ、手を振った。男の方も気がついたのか、手を振りながらこの屋敷に向かってくる。

「どうしたのかしら？なんだか急いでこっちに向かってくるような・・・」

近づくとフォースは、息を切らし汗を流しながら走っていた。

「どーしたの？」

声が聞こえる程度の距離で、ピュアは叫んだ。

「帰つて来るんだ！カインとアベルが帰つて来るんだ」

フォースが叫んだ瞬間、窓辺の一人は顔を見合させて微笑んだ。必死に走つてくるフォースの言葉は、待ちに待つた人の帰りだと。彼らがこの町から旅立つて、赤子が走り回る子供に育つ程の時を経た。ブレインとピュアに懐かしさが込みあがる。懐かしい人の名前とは、これ程までに心を暖かくするものだろうか。その暖かな感情を解り合える兄妹は、再びフォースの姿を見た。

「兄さん、フォースがわが家に着いてしまいますわ。早く迎えに行つてあげましょう」

フォースを出迎えにピュアは一階へと急いで降りて行き、ブレインもその後を追つて、静かに動き始めた。

「アベルの精神波が届いたんだ。明日の昼には、この町に帰つてくるそうだ。」

「では時は来たのだな？」

フォースの言葉に、確認を取るようにブレインは問いかけた。

「おう、明後日の満ち潮で碧の海が一番光輝く時、復活するのか。カインの預言通りになればね」

「そんな、神官長の役職を放り出してまで、旅に出て修行を積んだカインが、間違はずないじゃない。アベルは？元気そつだつた？」

「ああ、姿は見えなくても声でわかつたね。相変わらず口の悪い女だよ！」

「それはフォースにだけよお」

笑う妹の姿と、親友であるフォースの姿を優しい瞳で見つめているのは、ブレインだった。

「じゃあ、明日の昼にもう一度、来るから

「警備の方は大丈夫なの？」

軍隊を指揮するフォースの最近の多忙さを心配して、ピュアは問うた。黒の存在が現れ始め、街の外では魔物が闊歩している。だがピュアの言葉を笑顔で「大丈夫、大丈夫」と告げ、ブレイン宅を出た。

「とうとう帰つてくるのね。そして・・・」

「ああ、時は来たれり・・・だ」

どこか寂しげな二人の姿は、最後の役割を知っているから。もう、止める事のできない時が動き始めたからだった。

昨日と同じようにブレインは、窓辺で外を見ていた。今日は、力インとアベルが長い旅から帰つてくる日である。久方ぶりの再会に、ピュアは朝から昼食を用意して待っていた。

窓から三人の姿が見えた。大柄で、精悍な体つきのフォースが見えた横に、カインとアベルが並んで歩いていた。性別の違う双子の彼らは、性別を越えた不思議な魅力と、そつくりな美貌をしているので、見分けにくい。カインはおでこの正面に蒼い黒子があること

と、碧い口紅をつけている事で分かる。女と見間違う姿だが、性別は男である。アベルと言えば、女の性別を所有するが、飾り気もなく、神官としての長衣を羽織っているだけであつた。二人が共通するのは姿の形全てに及んだが、髪が特に印象に残る。肩のあたりまでまっすぐだが、肩下からはウェーブのかかった神秘的な髪だ。

久しぶりにカインとアベルの姿を見たピュアは、出迎えに走った。親友のアベルに早く再会したいのである。

「アベル！」

玄関を過ぎ、ピュアは親友に抱きつく。

「ただいま、ピュア。元気だった？ フォースにいじめられなかつた？」

「なんで、俺がピュアをいじめるんだ！」

「あんたって、がさつだからねえ、ピュアを任すのが心配なのよねえ」

仲が良いのか悪いのか、再会早々騒いでる二人の横で、ブレインとカインの静かな再会もあった。

「ただいま帰りました」

「もう、待ちくたびれたぞ。神官長のいない町は、裁判官がなにかと忙しいのもだ」

カインとブレインは町を管理する、神官長と裁判官長である。それなりの落ちつきと威厳に満ちた笑みで、二人の会話は進んだ。

「申し訳ありませんでした。でも今から私があなたの分も頑張りますよ」

「ああ、信じていいよ。お前がいるから、私は安心できるのだから・・・」

五人の再会に話は途切れることなく、夜を迎えた。

「さて、そろそろ明日の段取りの説明を始めよう

ブレインが旅の話などで盛り上がりしている場を沈めた。

「復活の儀式の詳細は、カインが説明してくれ

カインが、瞳でうなずき説明を始めた。

「まず、黄金の神殿で儀式を始めます。明晚、碧き海が満ちて、一番光輝く前に、次に述べることを用意して下さい。アベルが黄金の神殿に転送してくれますので、フォースは辺りにある六本の柱を、すべて一人の眠る祭壇に並べて下さい。ピュアは、その柱に清水をふりかけて清めて下さい。私とブレインは魔物から墓を守ります。光輝いた瞬間に二人は目覚めるでしょう」

淡々と述べたカインは、一同に確認をとり、説明を終えた。

「早くお会いしたいわ、私たちも無事に転生したのですもの、の方達もきっと無事に復活されるに違いないわ」

ピュアの優しい気がありを包む。このピュアの気にふれて、五人の心は落ちついた。普段の姿はとぼけた普通の娘だが、この優しい気が彼女の力である。純粋な優しさと愛を持つ彼女以外、この気を放てる者はいない。

ピュアはこのよつな氣を持つ事によって、碧の五戦士として選ばれたのだ。他にカインは預言の力、アベルは道しるべとして、転送、移動の能力を持つている。フォースは通常では考えられないほどの体力を持つている。残る一人、ブレイン。ブレインは彼しかできない事がある。それは悲しい能力。いや、能力と言つより運命。彼の運命が碧の五戦士の一員となつているのだった。

ブレインの悲しみが、五人を包まぬように、ピュアは優しい気を送り続ける。

カインとアベルが旅から帰って、二日目には復活の儀式を行う慌ただしさに、もう少しうつくりしたかった様子だが、五人には大切な役目がある。そのために五人は転生してきたのだから。

「準備はいい？」

快活なアベルが円陣の中から四人に向かっては呼びかけた。

「ああ」

兄であるカインの物静かな声が、残りの三人分の返事をした。

「では、心を落ちつけて、この円陣の中に入つて」

アベルの言葉に、まずピュアがアベルの元に向かう。続いてフォースが目を閉じながら円陣に踏み込もうとする。

「では、お先に」

カインがブレインに断つて円陣に進んだ。

「ついに来てしました。この時が・・」

小さな独り言を呴き、ブレインは深い碧の瞳をアベルに向けて歩き出した。

「いざ、黄金の神殿へ」

アベルが叫んだ後、呪文が子守歌のように聞こえ始め、光が五人を包み十の瞳が一瞬すべて閉じた。次に開けたときには、懐かしい黄金の光に包まれていた。

「黄金の光・・」

ピュアが呟いた。

「懐かしがつている場合じゃないぞ、ピュア。さあ準備開始だ」この場面で一番忙しい、フォースが一番に動き始めた。

「では、我々も行きますか」

カインがブレインに呼びかけ、一人は魔物のいる方角に向かった。

「最近、魔物が力を増しているから気をつけて！」

離れる兄を見つめてアベルは、心配そうに叫んだ。妹を気遣うかのように一度振り向き、ブレインと共に剣を抜く姿を残し、一人の姿は見えなくなつた。

「さあアベル、私たちも準備をしましょう。すぐに碧き海は満ちてしまつわ」

このピュアの言葉で始まつた準備も終わりに近づき、ブレイン達が少し疲れた様子で帰つてきた。

「準備は出来ましたか？」

確認をとるカインにアベルは近づき、流れる汗を拭きながら言った。

「ええ、準備は完璧よ。あとはあの六本柱に光が集まれば大丈夫」

「おいおい、アベル。カインの流れる汗は拭いて、俺のはどうなる

んだ」

先ほどから、すごい汗をかいているフォースが不満を訴える。

「あんたのは、ピュアが拭いてくれるでしょう、ねえピュア」「突然名を呼ばれたピュアは、照れながらフォースに近づいた。

その光景を、いつも優しく見守るのはブレインであった。妹であるピュアは、フォースがいれば生きてゆけるだらうと安心する。ブレインはピュアを守つてゆけない事を知つてゐるから。だから、心から安心する。そして自分の運命を快く受けとめられる。もし神が存在するならば、ブレインは心から感謝するだらう。碧い純粋なピュアの兄として生を受けたことを。そして、この素晴らしい人々に再び出会えたことを。

五人がたたずむ中、六本柱に黄金の光が集まり始める。

「なんて綺麗」

ピュアがそうこぼすほど、その光景は美しかつた。黄金の一人を象徴するかのように、世界が一人を欲しているかのように美しかつた。その光景に瞳を奪われていたとき、六本柱の中央から光輝く黄金の二人の姿が映し出された。

「マリ様、エミリアン様」

ピュアは喜びに声を上げ、近づこうとしたが、カインに止められた。「まだ、駄目です。それに、私たちが覚えていても、あの方達が覚えていふとは限りません」

「私たちのこと、忘れてしまつてゐるの?」

「…まあ…」

カインの言葉はピュアの言葉を肯定してゐるようにしか聞こえなかつた。

「しかし、忘れていたとしても、すぐに思い出されますよ」
そう付け足すカインにピュアが喜んだ。

「さあ、ピュア行こう」「う

アベルの声でピュアが駆け出し、その後を四人はついていった。
流れる黄金の長い髪。摩理は瞳を開いた。繰り広げられる世界に

驚きながら瞳を開いた。黄金に輝く中、見たこともない碧い髪の少女が近づいてくる。

「……は・・天国か？」

横から聞き覚えのない声が聞こえた。

「貴方は？」

摩理の隣に立つ、まっすぐ肩までのびる金の髪の持ち主に聞いた時、彼らの名は呼ばれた。

「マリ様、エミリアン様」

二人は、死んだばかりだと言つのに、訳の分からぬ世界にやつてきたようである。

第一章 突然の生か死か（後書き）

いつしか黄金の若者蘇り
碧の五戦士転生す
再び闇を葬らん
魔の山の麓に碧く光る湖ありて
この世を平安に導かん
悲劇と正義と愛の末
その湖 碧の涙と呼ばれたり

第一章 碧き五人の戦士と黄金の若者

薄暗い部屋の中に、美しい若者達はいた。四角い、碧い木のテーブルを囲み、かなり長い説明をブレインは続けた。

前世・生をうける前に生きた世界。ここが、摩理とエミリアンが生まれる前に存在した世界だと言うこと。黄金の姿を持つ若者が、世界を救うということ。今、世界が闇に覆われようとしていることを簡単に話した。簡単に話して、かなり長い時間であった。それほど膨大な会話の内容だと言つことだ。

「そんな・・事を言われても・・」

「しかし、ここは天国ではなさそうだね」

「天国とは、何ですか？」

聞いた事のない言葉をカインは聞いた。

「何というか・・死後の世界だよ」

エミリアンは何とか答えたが、その説明は無意味なものだった。

「まあ、復活なさったのに、死後の世界はないでしょ？？」

「そうですとも、これから、お一人には闇を消滅し、永遠の平和を気付いていただかなくてはなりません」

ピュアとアベルには、元の世界の事を理解しようと言つても無駄なようである。

不思議な感覚を摩理とエミリアンは覚えた。自分たちは地球という星で、よく普通の生活をしていただけなのに、突然、前世だ闇だといわれてもピンとこない。しかも、この世界は青いサングラスを掛けて見ているように、全てが碧で構成されているのだ。何とも言えない違和感を二人は受けていた。

しかしエミリアンは、前に一度この世界に来たことがあるような気がしてならなかつた。確かに、この碧い美しい世界に入り込んだことがあると確信できるほど、その思いは強くなる一方であつた。

「確か・」

エミリアンの一言で、室内にいた六人は一斉に言葉の発した方向をみた。

「どういう事？前世を覚えているの？あなた、わかるの？この世界が？」

摩理は自分の戸惑いを共有できる人と、信じていたエミリアンが、そうでない事を知り、焦った。

必死に聞いてくる摩理の姿に、少し驚きながらエミリアンが答えた。

「覚えていると断言はできないが、この人たちに出会ったことがあるような気が・・・」

エミリアンは、ゆっくり碧き人を見た。そして、不安そうに、不思議そうに自分を見つめる摩理の姿を見た。

その瞬間、エミリアンの頭脳に大量の記憶が蘇った。忘れた映画を一画面見たときのような感覚。しかも、忘れていた感情までも一気に流れ込んでくる。摩理の泣いていた時のこと、ブレインの事も・・・。一気に加速をつけて前世の記憶がエミリアンを支配しようとしていた。

「少し一人になりたい」

エミリアンはそれだけを告げ、返事を待たずに部屋を出て行こうとする。また、その行動を誰も止めることもなく、エミリアンを見守つていた。摩理一人が、なにが起こったのか全くわからないまま、エミリアンは一人で部屋を出ていった。

彼は前世の記憶に耐えられなかつたのだ。大量の記憶を前に、現在の自分が消えてしまいそうなのを必死にこらえる。しかし、愛しい。その感情が彼を支配する。前世の記憶が彼の全身を取り巻く。自分自身は前世とは別の人間だ。

そう強く思うことで、今の自分を持ちこたえようとするが、愛しい気持ちは止まることを知らず、摩理を愛する心は思うように動かなかつた。あの、とぼけた娘を今の自分も好きなのだ。その考えにしがみつくなかった。ただの言い訳だが、止めようのない感

情を、そう思うことにより自分の感情にするしかなかつたのだ。自分で他の感情が支配するなど、Hミリアンには許されることではなかつた。この優しげな面立ちとは別に、彼の心は鉄壁のプライドを持つてゐるのだ。

前世。思い出さなかつた方が良かつた。と、今の自分自身は思う。こんなに悲しい前世なら、知らずに生きて行けば良かつた。知つてしまつた以上、自分の運命は大きく変わる。そして、前世の自分が安心しているのだ。この運命から逃げ出すような、負け犬に成らなかつたことを。摩理と再び巡り会えたことを。

Hミリアンの気持ちは複雑で、それを制御するのに必死であった。前世の自分だけになれば楽になれるのに、彼は今の自分を決して手放そうとはしなかつた。

「Hミリアン大丈夫なのかしら？ 真つ青な顔で出ていつたけど…。思い出したのかしら？」

なにも知らない摩理は、碧き五人を前に、とぼけたことを呟いた。間の抜けた言葉に、一同返す言葉が見つからなかつた。先ほどの様子を見れば、見当もつくるだろう？ といつて見られたことには、さすがに鈍くさい摩理も気がついた。

「私、何か変な事を申しました？」

突如、フォースの大きな笑い声が鳴り響いた。

「フォース、失礼じゃない！ ごめんなさい、マリ様。Hミリアン様ならきっと大丈夫です。夕食には姿を見せてくれますわ」

アベルの声に、フォースの笑いは収まつたが、そのかわりブレインとカインの笑い声が、苦しそうに小さく聞こえたのだ。笑い上戸の二人は、アベルに注意されても、なかなか止まらなかつた。

「相変わらずだね。マリは…」

摩理にとつては初対面である、ブレインの笑いを含んだ、優しい声が摩理に届いた。なんと優しい瞳と声で語りかけるのだろうと、摩理は感動した。だが、ブレインの言葉は自分に言つた言葉ではない。

聞こえたと同時に、摩理はそう思つた。そして心の奥底で、前世の自分に嫉妬を覚えた。それは、まだ気付かない、ブレインへの想いの始まりだった。

「失礼しました。摩理様。氣を悪くされましたか？」

少し戸惑つた摩理の姿に、カインは気付いた。

「前世、あなたの夫でしたエミリアン様は大丈夫です。心配なのはあなたの方です」

摩理はカインの言葉を理解できなかつた。

「夫？」

彼が夫だつた？そんな、そんなことはあり得ないと、彼女は強くそう思つた。なぜなら目覚めたとき、ブレインの姿を見て気が落ちついたのだ。あの時、ブレインがいたから、摩理はこの世界を、一応なりとも認めたのだ。エミリアンのはずがない。

「そうです。前世では、国を統一した王と女王です」

摩理の想いを否定するようにカインは淡々と言つた。

「カイン、私の前世を詳しく教えて！」

前世は関わりないと言い切れるほど摩理は強くはなかつた。前世が自分にとつてどのような影響を与えるのか、それとも関係ないのか。エミリアンは蒼白になつて一人になりたいと言つた。夫であつたエミリアンが・・・

前世がわからないことが摩理を不安させる。

「教えて、前世を・・・カイン」

懇願する摩理にカインは頭を横に振つた。

「自分自身で思い出さなければ意味がないのです。もし誰かに前世を教えられても、あなた自身の中にしか、本当の前世はないのです」取り方によつては、冷たいとも優しいとも言える口調だつた。そんなカインに言い返せる者などいないだろう。摩理であつても、それ以上は聞けなかつた。

「わかつた」

不安が摩理の胸を駆けめぐる。見た目も元氣をなくした摩理に、ピ

ピアが部屋を出るよう促した。

「もうお疲れでしょうから、摩理様を寝室にお連れします」

まだ眠ることは早いが、そう言って摩理を連れ出した。

「カイン」

今まで黙っていたフォースが、摩理に対する態度を糾弾するかのように名を呼んだ。

「これでいいのです。の方はエミリアン様を愛する」と、一番幸せになれるのです。あれ以上の悲しみを、摩理様に近づけたくないのです」

納得した面もちでフォースは頷いた。

「ブレイン、気をつけて下さい。あなたは似すぎている。摩理様が、あなたを愛することの無いよつこ・・」

「ああ」

消え入りそうなブレインの返事に、フォースはやりきれない表情を見せた。

「さあ、夕食まで時間もあることだし、ピコアのために買い物でも、付き合つか

アベルの殺伐とした物言いに、一同ピコアを誘いに行つた。

「摩理様、ゆっくりお休み下さい」

扉の外からピコアを呼ぶ声が聞こえた。

「ありがとうございます、ピコア。みんなが呼んでいるわ、もう行って

名残惜しそうにピコアは部屋を出た。

一人になりたかったのだ。日本で生まれ育つて、まさか、このようないい世界にくるとは夢にも思わなかつた。夢ならどんなに良かつただろつ。

「ああ、もう、かあさん、なんとかしてよ・・」

もう一度と会うこともないであろう、母の顔を思い出して泣きそりになる。涙をこらえて、瞳を閉じた。

「かあさん」

一言つぶやき、摩理は深い眠りについた。

「マリ、マリ」

夢の中で摩理を呼ぶ声がある。

「マリ、君の事が大好きだ。僕がマリを守つてあげる
それは懐かしい少年の声。利発そうな少年の声が摩理を安心させる。
「姿を見せて？あなたは誰？」

「マリ、私の大切な姫君。君がもう少し大人になつたら、迎えに行
くよ。だから、アベルを困らして黙つて遊びに来てはいけないよ」
優しい低い青年の声。先ほどの少年が大人になつた声だとすぐにわ
かる。

「あなたは誰なの？」

「私だよ」

長い黒髪の後ろ姿が見える。その後ろ姿は愛しさと懐かしさを感じ
る。

「姿を見せて、お願い」

思い出す。この人は誰だったのか。きっと大切な人だ。その思いが
強くなる。わかる。この人は私の愛した人。私を愛してくれた人。

「あなたは誰？」

懇願する摩理に、碧い髪の青年が写つた。

「自分で思い出すのです」

はつと夢から覚めた。

「なんて夢、カインの姿で目を覚ますなんて・・・」

カインを嫌つてゐるわけではないが、もう少しで思い出していたよ
うな気がする。愛しい気持ちがこみ上げてくる。あれは、ブレイン
？あれはブレインではなかつただろうか・・・

「摩理様、起きてますか？夕食の用意が出来ました」
ピュアの声で摩理の思考は止まつた。

「はい、今行くわ」

返事を終えて扉を開け、ピュアと共に食堂へと向かつ。

「よくお休みになれました？」

「ええ、でもなんだか変な夢を見てしまって・・・」

少し話したときに食堂の前についた。摩理はブレインに会うのに緊張していた。

「摩理様をお連れしました」

ピュアの声に一同、摩理を見た。

エミリアンの視線が痛いほど摩理を見つめる。

「お待たせしました」

何気ない会話の中、穏やかな雰囲気で食事は進んだ。

「私・・・」

摩理が穏やかな雰囲気の中、それを壊すかのように呟んだ。

「どうかなさいました?」

驚いてピュアが聞き返す。

「あの、私、夢を見たんですね」

「どんな夢ですか?」

精神鑑定士か、夢占い師のような口調でカインが聞き返す。

「あの、なんだか、すごく懐かしい、本当に安心できる少年の声が聞こえるんです。私のことが大好きだって言つんです。その声が大人になつて・・・優しい言葉をかけてくれるのですが、姿が見えなくて・・・。だんだん不安になつて必死に声をかけると、後ろ姿が・・・懐かしい後ろ姿が現れて、そして・・・」

「そして?」

全員が、緊張の中、摩理の言葉を待つた。

「カインが現れて、自分で思い出すのですって・・・」

フォースは爆笑した。いや、カインと摩理以外は全員笑つた。

「そうだよな、マリって昔から、カインには弱いんだもんな」

エミリアンが軽い口調で言つた。摩理も軽い口調で何気なくエミリアンに返した。そう、自然に言葉が出てしまったのだ。

「それは違うわ、エミリアン。カインには色々お世話になつてたから、だから、強気にでれないだけよ」

摩理の言葉で始まつた笑いが、マリの言葉で一瞬にして収まった。

「思い出したのですね！」

アベルとピュアが一斉に声を上げた。だが、当の本人は不思議そうに瞳を大きく開けたままだつた。

「私、何か申しました？」

喜びはつかの間のようであつた。

その後、穏やかに食事を済ませた。各自、家に帰るなり、寝室に戻ろうとした時、摩理は勇氣を出した。

「あの、ブレイン・・さん」

「ブレインで良いよ」

一人きりになると、摩理は異常なほど緊張した。まるで恋の告白でもするかのような場面を想像し、一人で顔を赤らめた。

「あの、さつきの夢なんですけど・・・

「何か？」

少し悲しそうな表情をした様な気がするが、摩理は気のせいだと自分に言い聞かせ、話を続けた。

「あの、あの夢の中で、後ろ姿とか、雰囲気とか、その、あなたに、あつ、内容はともかくとして、その・・・夢の人物は、あなたではないかと・・・」

「違う。それは私ではないだろう。マリは、もっと別のことを思い出すべきだと思うよ。君にはとても大切なことがあるはずだ。私の事など気にしなくても良いんだ」

冷たい否定。だが、胸が締め付けられるほど、ブレインの瞳は悲しみを称えている。足早に去ろうとする、ブレインの寂しさを感じる背中を見つめた。涙で滲んで見えなくなるほど、彼女の瞳には訳も無く涙が溢れ出た。

ブレインの悲しい瞳が気になる。懐かしい。けれど、それだけじゃない感情を摩理は頬を伝う涙で知った。あの悲しい瞳に恋していることを、摩理は知つてしまつた。

「どうかなされましたか」

ピュアの声が後ろから聞こえる。

「何でもないの！お休みピュア」
涙を見せたくない摩理は、それだけを告げて寝室に入った。
彼女は、まだ前世を知ることは出来なかつた。

黒き者は、今も闇に喰われ続けている。永遠に近い程の時を、ずっと闇と戦っているのだ。もつ、思い出すのは愛しい娘の事だけである。

「お父様、黒の民つて、真つ黒で恐いのでしよう?」

初めて黒の国を訪れる小さなマリは、不安そうに国王に尋ねた。

「恐くなどないよ。黒の民は美しい、本当に心から美しい人々だよ。この世界を闇から守ってくれている人々だ。強くて優しい。きっとおまえも好きになるよ」

碧く淡い髪を撫でながら、威厳ある碧王は娘に言った。

「ふうん」

マリは黒といつのを本でしか見たことがない。もちろんその本は黒の国より持ち込まれた本なのだが、初めて見た日には、夢にまで黒と言づ色を見るほど衝撃を受けた。自分の姿も、まわりの建物も全て碧い世界で育った彼女にとって、恐怖感を抱く色だった事を覚えていた。

「お馬に乗つていいくの?」

「いいや、神宮のアベルが連れていくてくれるのだ。田を開けたら、もう黒の国だ。さあ、アベルのお迎えだ。行こうか」
小さなマリの背中を優しく押しだした。その先には、男とも、女とも言えない不思議な魅力の子供が立っていた。

「おお、アベル、この子が儂の娘、マリだ」

碧王は、マリの生まれて揃えるほどしか切つたことのない、長い髪を自慢した。マリの髪は、波打つ碧の海のように光輝き、碧の國の象徴と言われるほど綺麗だった。

「初めてまして、マリ様」

優しくほほえむアベルのじぐさは、少女のものであった。少し安堵

感をマリは覚え、挨拶を交わした。

「アベルは道しるべの神官として、代替わりしたばかりじゃ。マリとも同じ年頃のはずだが？」

「ええ、マリ様とは殆ど変わりません」

快活な少女は、威厳のある王の前でも堂々としていた。それが彼女の生まれ持つての性質なのだろうか、決して不快感を相手に与えることはなかつた。

「マリと良い友達になつてくれ。マリも良い子にするんだよ

「はい。アベルよろしくね」

一コリと笑うマリの姿は、同姓であるアベルでさえも、頬が紅潮するほど魅力的だった。

道しるべの神官と、聞き慣れない言葉がマリの脳裏から離れなかつた。だが、その道しるべとしての能力を、次の瞬間にマリは体をもつて知ることになった。

「ええ、よろしくお願ひします」

「では、行こうか」

碧王の声で、アベルは移転の呪文を唱え始めた。

マリは体が一瞬、宙を浮く感じを受けた後、黒い人々が目の前に現れた。

移転の能力。これがアベルの能力だった。

「よく来られた、碧王」

呆気にとられるマリの前に、恐いという印象より、強そうな黒い髪の大きな男の人人が立ちはだかった。

「久しいの、黒王」

旧知の仲である二人は、久しぶりの再会を喜んだ。

「黒王の『ご子息か？』

黒王の後に、二人の少年が控えていたことに気付いた碧王は、少年達に声をかけた。

「はい。イーブルと申します。」

利発そうな少年で、目元が少しきつい印象を与えるが、一瞬微笑ん

だ時、驚くほど優しい瞳になる。

マリは初めて同年代の男の子に出会った。黒の民が、これほど美しいとは思いも寄らなかつたが、それ以上に、優しそうな瞳に驚いた。小さなマリの頬は紅潮し、言葉を失つた。

「ほう、凜々しいしつかりした王子だな」

碧王の言葉にお礼を言つイーブルの姿を、じつとマリは見つめていた。

「私は、ブレインと申します」

イーブルを少し幼くしたような、まだ可愛いと言つ表現が似合いでうな少年である。

「ブレインと申すのか、マリとは殆ど同じ年のようだ。よろしく頼むよ」

碧王より、言葉を受け取り、一人は同時に返事をした。

「マリと申します。よろしくお願ひします」

この時、王子達の心中は全く同じと言つて良いだろう。マリの美しさ、愛らしさに驚いていたのだ。こんなに綺麗な碧い髪は見たこともなかつたし、また大きい吸い込まれそうな瞳は、亡き母に少し似ていた。高い声は不快感を「覚えることなく、心地よい鈴の音にも聞こえる。

「さあ、私は碧王と話がある。姫君に庭を案内してやつておくれ」碧王の言葉で、三人は庭に向かい、王達は応接間に向かつた。一人、アベルが円陣の見張りに残つた。

「マリは、兄弟はないの？」

時間が経つと、黒き少年二人と、碧き少女は仲良く話をするようになつていた。

「ええ、私はずっと独りぼっちだつたの。兄弟もないし、同じ年の子がないくて・・・とっても寂しいわ。いいなあ、あなた達は兄弟がいて・・・」

自分たちに羨望する彼女を、一人は優しい瞳で見つめた。

「では、私たちが兄弟になつてあげるよ。いいな、ブレイン」「当たり前だよ。兄さんが言わなければ、僕が言つてたよ

「本当に?」

「マリは嬉しさのあまり、信じられなかつた。

「本当だとも。信じられない様だから、誓いをたてようか?ブレイン」

弟に声をかけて、少年達は少し離れた。マリに背中を向け、一人で何かしている。マリは不思議そうに見つめるが、背中の向こうで何をしているのか、見当もつかなかつた。

少年達が振り返ったとき、マリは驚いた。一人は、腕から黒い血を流しているではないか。急いで駆け寄るマリに、少年達は声を揃えて言つた。

「僕たちは、マリを生涯守ると、この腕の文字に誓います」

血が流れる傷口は、マリの名が刻み込まれていた。

「こんな・・・ごめんなさい。私が信じないばかりに・・・私も、私も・・」

マリは自分の腕にも一人の名を刻もうとするが、イーブルの腕がマリの行動を妨げた。

「いいんだ、マリ。可愛いマリ。マリに傷なんかつけちゃいけない。美しいマリ。これは僕たちが誓いたかったんだよ

「イーブル」

マリは初めて出会つた少年に、初恋にも似た感情を抱き始めた。

幼い王女と王子は自分たちの運命も知らぬまま、幸福な時は過ぎていつた。

その頃、碧王と黒王は密室にて対談をしていた。

「私たちの代で、黄金の二人と、黒き者は現れなかつた
碧王の苦い声が密室に響いた。

「次代かもしれんが、私は一人の王子を授かつた。一人の内、どちらかが黒き者になるのかもしれない、ならんかもしれない」

「娘にはまだ言つておらんが、もつ王子達には預言の存在を伝えたのか？」

預言 - 黒き民から、闇に侵された黒き者が現れ、碧き国から黄金の二人が、黒の国¹⁾と黒き者を封印するといわれる預言。黒の国の滅びを預言した文献が、この黒城に古くから存在していた。

「まだ、あの預言を伝えるには幼い。もう少し時を見て話そうと思う」

「しかし、我々の命とて保証は出来ぬ。王子達が、自分の立場をわかる頃には伝えよう」

碧王と黒王は互いに約束し、対談を終えた。

しかし、時は王子達が成人するまで待てなかつたのだ。この出会いより、少女が恋を知る年になるまでに、預言は熟す。

イーブルは精悍な青年に、ブレインはまだ幼さを残すが、立派な青年に育つた。マリは少し落ちつきはないが、美しい娘へと成長を遂げた。

イーブルは文武共に優れ、ブレインの憧れの象徴であった。もちろんマリも少し年上のイーブルを憧れ、そして恋をしていた。

「ピュア、ねえ、ピュア」

マリは自分付きの侍従である、ピュアを呼ぶ。とても愛らしい、マリより少し幼い感じのする淡い碧い髪の姿が現れる。

「ねえ、アベルに頼んで」

おねだりするマリに、呆れた表情でピュアが答えた。

「ええ、またですか？ 王様に怒られてしましますわ！ ダメですよ」

「そう、そんな事言つ的一ピュアつたら冷たいなあ。私にそんな態度とつていいいの？ フォースにばらしちゃうぞー！」

「ええ！ そんなの卑怯ですう」

将軍の息子である、フォースを好きなピュアが、顔を真っ赤にして反論するが、マリはなかなか聞いてくれそうもなかつた。

「ピュアだつて、フォースに会いたいでしよう？ 私だつてイーブルに会いたいの。もうずいぶん我慢したのよ！ お願ひ

困り果てたピュアに透き通るような、快活な声がかかった。

「良いじゃない！ピュア。怒られるのはきっとマリ様だけよ」

「アベル」

マリの喜びの声と、ピュアの驚いた声が一斉に響く中、アベルにつくりりな男の人気が現れた。

「カイン」

「今日の夕刻までにお戻りになるのでしたら、私が何とかごまかしますよう」

「さすがカイン！感謝するわ」

マリは大喜びで、転移の円陣に入つた。

黒城の隠れた転移の円陣についたピュアとアベル。そしてわがままなマリは、王子達の部屋にこそそそと向かつた。さすがにお忍びであるから、堂々と会見は望めない。イーブルとブレインの部屋は隣どうしだが、恋しいイーブルの扉をノックする。

「いないのかしら？」

「あきらめましようか？」

ピュアの言葉にもめげずに、マリはブレインの部屋をノックした。中からは人の気配がする。

「マリー…どうしたんだ。またお忍びかい？」

驚きと苦笑を交えて、魅力的にブレインは出迎えてくれた。

「だつて、王宮は退屈なんだもの」

「（）だつて王宮だよ？」

意地悪いブレインの言葉と、ピュア達の笑いをやかむように、マリは話題を転換した。

「それより、イーブルがいないの」

「ああ、最近おもしろい預言書を見つけたとか言つて、書庫にこもつてるよ」

連れていつてあげると、と黙つてブレインを先頭に、再びここへと歩き出した。

清閑な書庫に一人、真剣な表情をしたイーブルがいた。おもしろい預言書とは、例の預言のかかっている本である。

黒の王子、闇に侵され世界は暗黒の時代を築く

「こんな重要な事を、父上は何故黙つておられるのだ。私たちが、まだ知るところではないのだろうか？」

「イーブル」

深く考え事をしていたイーブルの後ろから、突如、愛しい娘の声が聞こえた。

「マリ、なんで……」

突然やつてくるのは、いつものことだが、まさか書庫に突然姿を現すとは思わなかつた。

「ブレインか……駄目だろ、こんなところまで……さあ、見つからないところまで行こう」

読んでいた文献を元の場所に戻しながらイーブルは考えた。

マリが黄金の娘となる可能性もあるのだろうか。私たちが黒き者になる可能性があるように。しかし、碧の国の王族とは表現されていない・・が、私たちは黒の王子と出ている・・まさか、私たちの代ではおこらないであろう・・

代々の王子達が、そう思つていたに違ひない。彼らは世界を守つてゐることに、誇りを持つていた。その彼らが、闇に侵され、世界のバランスを崩そうとするなど、黒の国を滅ぼすなど考えもしないことだつた。

しかし、預言は成就する。預言が、この誇り高く美しい少年達の運命を翻弄するのだ。

「マリは、いつも私たちを困らせる。ピュアだつて、きつと困つているよ」

「だつて、会いたかったんだもの・・」

いつしか黒い森の中で、一人きりになつたマリとイーブルは互いの

気持ちを確かめあつていた。

「どうして、そんなに会いたいの？」

意地悪なイーブルの笑みと口調に、マリは真っ赤になつた。

「だつて、好きなんだもの・・」

「好きだと、どうして会いたいのさ」

「ただ・・ただ一緒に過ごしたいの。会えないでいることが不安になるの。浮氣するとかではなくて・・その、一人でいるのが自然に思えるの」

イーブルは愛しそうに、彼女の髪に口づけをした。

「私もだよ。可愛い姫君」

お互いが初恋の人である。今は小さな恋人同士だが、この真剣な気持ちは大人にだつて負けないだろう。小さいからこそ、純粋に相手の立場とか、何も考えないでその人だけを見つめるのだろう。時が一人の身分を認識させても、離れられなくなる。イーブルは、黒の國の第一王子。マリは碧王の一人娘。第一継承者同士の恋の行く末は悲しい結末を迎えるかもしれない。だが、二人は今の瞬間を大切にしていた。

「マリ・・・」

うとうと眠りそうになつていたマリは、イーブルの驚いた声で目を覚ました。

「どうしたのブレイン」

「君の髪が・・黄金に・・」

黄金・・。マリにとつてその言葉は、初めて聞く不思議な音だった。

「オウ・・ゴン?」

自分の髪が変色していることに気付いた彼女は、髪を擦りあわせた。

「やつ・・なに?これ・・落ちないわ」

必死に擦るマリの手を、イーブルは止めた。

「やめるんだマリ。これは取れないんだよ。そして・・・」

悲痛な表情を浮かべ、イーブルは続けた。

「そして、君の瞳も黄金に変わっているんだ・・。これが、君の本

当の色なんだ」

イーブルは、まさか預言が自分の代で成就するなど思いもしなかつた。また、大切な、とても大切な、ただ一つの宝物が、その黄金の若者だつたとは・・信じ切れなかつた。自分に言い聞かすように、イーブルは彼女に告げた。

「君は伝説の、いや、預言に登場する、黄金の女王だ・・・」「何? オウゴンノジョオウ? 私は? 私は何者なの? 見ないで・・・そんな目で見ないで・・いやあー」

哀れみの瞳で見てしまつた。絶望の瞳でマリを見てしまつた。後悔したが、これで良かったのかもしない、と思う。いつかはマリが、イーブルかブレインを封印するのだ。今の内に情を断ち切つておいたほうがいいのだ。自分に言い聞かせ、彼はマリに言つた。

「君はもう、普通の娘には戻れないんだ」

「イーブル・・・もう・・・もう、聞きたくない・・・

マリはイーブルから姿を隠すように、走り去ろうとした。

「きやつ

マリの小さな悲鳴に、イーブルは条件反射のように飛び出した。

「どうしたんだ・・・

それは、聞くまでもなくわかつた。しりもちをつくマリの前に、黄金のまっすぐな髪の青年が立つっていたのだ。瞳は碧いが、黄金を纏う者であった。

まさしく、イーブルが大切に、自分の命より大切にしてきた、可愛い姫の生涯の伴侶だった。この青年を目の前にして、イーブルは正気を保つ自信がなかつた。自分の大切な姫を奪つて行く、目の前の青年をここで、今、ここで・・・殺してしまえば・・・。マリは・・・マリと自分の未来は・・・変わるのではないだろうか・・・。

自分の考えていることの恐ろしさに、イーブルの呼吸が激しくなる。

「君たちは・・・」

イーブルの殺意の対象となる青年は、不思議そうな顔をしていた。

何もわかつていの青年をイーブルは理解した。

何も知らない、この青年をイーブルは殺せなかつた。たとえ殺したとしても、世界が滅びる。きっと自分とマリの運命は、何も変わることは無いのかもしない。ただ、マリの運命が重くなるだけではないだろうか。

「この世界は、何なんだ？」

マリこそ驚いた。自分がぶつかつた青年は、自分と同じ髪しているではないか。

「あなたこそ、その髪は？」

「黄金の王だよ」

イーブルが低い、普段では考えられない声で呟いた。

「兄さん、どうしたんだ。さつき、マリの悲鳴が・・・」

今までの状況を見ていなかつた、ブレインが最後の言葉を飲み込み、姿を見せた。

「どうしたんだ・・・その髪は・・・」

見た瞬間に異変を理解した。後から追つてきた、アベルとピュアも同じである。

「マリ様が・・・黄金の女王だったのですね・・・」

アベルのいつも冷静な切れ長の瞳が、驚きを表していた。

「アベル、知つているの？ねえ、何を知つているの？」

必死に懇願するマリを哀れに思ったのか、アベルは澄んだ声で朗読した。

暗黒を生みし魔の山の麓に、黒き国ありて世界を守護したり

碧き聖なる光生みし海を包むよしに、碧き国ありて世界を照らしたり

たり

碧 - それは聖なる光、世界を構成する色彩

碧濃くなりて黒に蝕まれる時

黄金の王 黄金の女王誕生し

碧き五人の戦士とともにに戦わん

黒き者封印し

聖なる碧き光取り戻さん

「これが預言の書の概略です。黄金の王女はマリ様、貴女でござります。そして、黄金の王は・・・」

アベルは見知らぬ金の髪の青年を見た。

「私・・ですか？」

「ええ、そうです。そして、黒き者・・・は、まだわかりません。しかし、成就の時は来ました」

黒の王子から現れることを、ブレインは知らない。アベルの様子を見れば、アベルは知っているようだった。アベルが、イーブルを見つめる。その瞳は、悲しい、魂を失った者でも見るかのようにイーブルには感じた。

「どうなっているの？私が黒き者を封印する？イーブル、イーブル、ねえ、私を見て。私を助けて・・・」

呼びかけても、イーブルは視線を反らしたまま、声にさえ反応しない。

「兄さん！」

何も知らないブレインが、兄の態度に腹を立てて叫ぶが、それさえもイーブルは答えなかつた。

「どうして？私がこんな娘になつてしまつたから？ねえ、イーブル」マリはイーブルに近づき、手を振れようとすると、振り払われた。

「ああ、そうだ。もう、君を守ることは出来ない！」

そう言い切つて、イーブルは走り去つた。

「兄さん！何てことを・・・」

マリを庇いながらブレインは叫んだ。

「兄さんが、マリを守らないと言つなら、私が守る・マリ、私がついている。どうか、どうか、もつ泣かないで」

ブレインが、ピュアが必死に慰めるが、マリの心はイーブルのことで一杯だった。先ほどまで、あれほど幸福だったのが、他人の物であるかのように感じた。深い絶望が彼女を襲う。

愛し合っていた。彼と私は未来を不安に思いながらも、確かに愛

し合っていた・・・。

冷たい涙が彼女の瞳から流れ落ちる。それを隠そつともせず、立ち尽くしていた。涙が出てこることさえも、彼女は判っていないだろう。

「さあ。今日は、もう帰りましょう。あなたも・・・」

「あつ、俺、エミリアンと言います。エミリイって呼んで下さい」「いいえ、黄金の王を、そうお呼びするわけにも参りません。兄に叱られますわ。さあ、帰りましょう。王様に報告もしなければなりません。ブレイン様、黒王様に報告して下さい。黄金の若者が現れたことを。さあ、マリ様」

遠くを見つめるマリを包むようにして、アベルとピュアは歩き始めた。その後をエミコアンが訳も分からぬままについていった。

残されたブレイン。ブレインとて、マリを想う気持ちはイーブルに勝るとも劣らない。しかし、マリが兄を選ぶなら、それは良かつた。自分の尊敬する兄なら、彼女を安心して任せられると信じていた。だが、先ほどの兄の態度を思い出すと、信じられなくなつた。ブレインの心は初めてイーブルに嫉妬した。

なぜ、私を見てくれない。なぜ、私に頼ってくれない。

憧れ続けた兄を、初めて憎いと思った。憎悪・・闇のもつとも好む感情。闇がブレインに忍び寄る。

イーブルが一人、部屋に静かに、身動きもしないで存在していた。

「私は、闇になど侵されはしない」

「お前が欲しい。正義感が強く、深い愛を持つ、お前が欲しい。

「誰だ！」

「邪魔だ、お前の強靭な心が邪魔なのだ。

「闇・・だな」

確信した。地の底から心に訴える声は、闇。

「私は、負けはしない。私が黒き者にならなければ、世界も、マリも救うことが出来るのだ。貴様などに負けはしない」

「そうか、ならば仕方ない。貴様は諦めよう。

「ふつ、簡単に諦めるものだな」

「お前でなくとも、もう一人いるからなのう。黒き純粋な血を持つ者が・・・。誰だつたかのう。教えてくれないか?」

「きつ、貴様」

「おや、顔色が変わったねえ。祖奴もお前の大切な物かね?大変だろう、そんなに守る物があつてはのう。こちらに来い。楽になるではないか。もはや、あの小娘は金の野郎のものさ。」

「やめろお」

「ついでに言うなら、お前の守ろうとしている、小僧。先ほど、お前を憎んでおつたぞ。もう、そこまで呼んである。確かめるがよい。」

「ブレイン・・・入つてきては駄目だ」

叫んでも、ブレインは吸い込まれるように部屋に入ってきた。

「兄さん!なぜマリにあんな事を・・・許せない!僕は兄さんに、ずっと憧れていた。兄さんなら、マリを任せても良いと思った。だが、今は兄さんが憎い」

弟の激しい怒りを、初めて見たイーブルは、その姿が信じられなかつた。

「闇に操られているか」

イーブルがブレインに問いかけた。

「操つてなどいない。ただ祖奴の、心の奥底の気持ちを、手助けしててるだけだ。小奴の心ならすぐに入れそうだ。ふん、隙だらけじゃ。どうする?」

長い沈黙が一人と闇を包む。

「ブレイン、よく聞いてくれ。もう、時間がない。黒き者は、私たちのどちらかに生まれるんだ。マリに、マリに伝えてくれ。愛していたと、約束を守れなくてすまないと・・・私はもう死んだと、伝えてくれ・・・これからは、お前がマリを守るんだ。いいな」

「闇よ、我が心を喰らうがいい」

ブレインは目を覚ましたように、イーブルの声を聞いた。

イーブルのまわりを闇が覆う。ブレインにも聞こえた。闇の狂喜する声が。

・ひょーほほっほ・・馬鹿な男。正義の心と愛を持った馬鹿な男。弟のために犠牲になるなど・・愚かな。しかし、これを望んでいた。これこそ念願が叶つたと言つものだ。ひょーほほ・

「にい・・わん」

暗い。もうどれ程の時が過ぎただろう。虚空の中に、一瞬の時なのか、永遠に近い時なのかもわからない。マリ、君はもう闇を封印したのだろうか。私と黒の国を封印したのだろうか・・・。一瞬、マリの酷く悲しむ姿が見えた事があつた。きっと、私を封印したのだろう。悲しまないで、マリ。これが私の運命。君には幸せになつて欲しい。君は、今どうしているのだろうか。私は、このまま永遠に眠り続けるのだろうか。闇は私の心を、まだ弄び続けるのだろうか・・。

彼は知らない。第一の預言の存在を・・・。今までに始まつたりする、復活の預言を。

いつまでも異世界人でしかない。

エミリアンの脳裏にはその言葉があった。それは、前世でも現世でも同様であった。そう、前世のあの時から、エミリアンはどの世界に存在しようとも、異世界人でしかなかつた。

自分の故郷と呼べる世界は地球なのか、それとも幻想的な世界なのか・・

「何だ？この世界は・・暗い、いや黒い」

エミリアンは自分の身に起きたことを思い出した。

確かに自分は戦っていた。将軍であるバサレット公爵の息子として、戦場を駆けめぐっていたのだ。そして・・そうだ、矢に射抜かれたのだ！

「私は死んだのか？ここはあの世と言つところだらうか」

どうも、自分の位置を確認できないまま、エミリアンは闇雲に歩いた。

流れるまっすぐな金の髪は、この黒を基調とした世界でも、自ら光輝き美しい。整った柔軟そうな体を使い、彼は森を抜けようとしていた。

「あれは・・・

ただ歩いていたエミリアンの瞳に映つたのは、自分と同じ金の髪だった。髪だけが黒い森の中で光を放っていた。エミリアンはやつとめざすものが見つかり、歩き始めた。

いやあ、と悲鳴が聞こえる。

慌てて彼はその声にむかい走り出した。木を越えたときに、強い衝撃を受け、彼は目の前を見た。

金の髪の少女がぶつかってきたことに気付いた。エミリアンが彼女に声を掛けようとした時、信じられない人物が彼の前に現れ言葉を

失つた。

「どうしたんだ・・・」

黒い人・・としか形容できない美しい男が、低いが澄んだ声と共に現れた。

男の自分でも見とれてしまうほど、その黒い人は綺麗だった。

漆黒の揃えていないが、絶妙なバランスを維持している長い髪。綺麗な鼻筋と口元。全て黒を含んだ艶のあるその姿は、彫刻のようである。しかし、瞳が意志のある生物だと主張していた。切れ長の鋭い瞳は、どうやら自分を見ていることにエミリアンは気付いた。

だが、エミリアンを見つめる青年は、何をするわけでもなく、驚いたように立ち尽くすだけであつた。

沈黙を破つたのはエミリアンだつた。

「君たちは・・・この世界は、何なんだ」

「あなたこそ、その髪は?」

髪?とエミリアンは思う。幼い頃から綺麗な髪だと讃められていたが、それほど驚く髪ではない。しかも、聞いてきた本人も同じ様な金髪であったから、エミリアンは不思議だつた。

「黄金の王だよ」

黙つていた黒い男が先程より低い声で言つた。

「兄さんどうしたんだ・・さつきマリの悲鳴が・・・どうしたんだ・・その髪は・・・」

エミリアンは驚いた。もう一人、黒い青年が現れたのだ。しかも、後ろに碧い少女達を連れて・・。

この世界が自分のいた世界ではないことを思い知らされた。

そして、運命が動き出したのだ。

預言書を朗読する碧い神秘的な少女から、自分は黄金の王と呼ばれ、もう元の世界には戻れないことを悟つた。

だが、エミリアンは、その後の展開を不思議そうに見つめるしかなかつた。

自分がこの世界の救世主的存在であったとしても、運命を受け入

れるには、まだわからないことばかりで、彼は途方に暮れた。

エミリアンの前には、悲しそうな黄金の少女。それが、同情だけ

でなくなつてくるのをエミリアンは、まだ気付かない。

そして、悲しそうな黒い青年の一人。驚きを隠しきれない、碧い少女の二人。

何が何だかわからない内に、エミリアンは碧の国へと連れられて行くのだった。

「君が黄金の王か・・・」

威厳に満ちた声が響いた。

碧い玉座には碧王が、臣下を見おろしていた。その横にマリが座り、カイン、アベル、フォースが王の前で膝を落とし頭を垂れている。そしてエミリアンが王の前に立ち尽くし、困り果てていた。

「ちょっと待つて下さい。私はただの・・ただの・・・」

エミリアンは言葉が続かなかつた。なぜなら、自分がこの世界で何者かもわからない。異世界人としか言いようがなかつたのだ。

説明する術を彼は持たなかつた。あまりにも、この異なる世界の知識を彼は持つていなかつたのだ。

「あなた様は、この世界にある預言書人物に相違ありません」

有無を言わせない声がエミリアンに投げつけられる。先ほどの碧い少女を、冷たい男にしたような印象を受ける、カインと名乗る男だつた。

「あなたの出現により、マリ様は黄金の女王として目覚められ、碧き五人の戦士は本来の力を手にしました」

誰にも負けない威厳と自信の満ちた姿があつた。

「黄金の王、エミリアン様。黄金の女王、マリ様。碧き五戦士は、私カイン、アベル、フォース、ピュア・・そしてもう一人。今夜中には出現するでしょう」

エミリアンを筆頭に、カインをのぞいた人々が信じられない表情をしていた。

「なんて事だ・・・」

碧い、美しい世界がエミリアンの前にあつた。碧いサングラスでも掛けたかのように映る世界は、元の世界では幻想的と称されるにふさわしい光景だった。

自分は死んで、このような場所に来てしまった。途方に暮れるエミリアンは、王宮の庭の木陰で、一人足を抱えて考え込んでいた。それは自分の運命ではなく、別の心に引っかかる黄金の髪の少女のことだった。

「エミリアン・・・」

後ろから甲高い。か細い声が聞こえた。

振り向くと、黄金の女王と呼ばれる少女がいた。エミリアンは平靜を装い、マリに語りかけた。

「やあ、マリ。元気がなさそうだね」

エミリアンは彼女が笑う顔が見てみたいと思った。どんなに魅力的に笑うのだろうか。

自分の運命より、目の前の少女のことが気になつて仕方がなかつたのだ。

「えつ、あなたを元気づけようと思つてここに来たのに・・・座つても良い?」

エミリアンは草を払い、座るように促した。

「私ね、失恋したみたいな」

いきなりの話題に、エミリアンはたじろいだが、少女の顔を見ていると、可哀想になつてくる。自分とそれほど変わらない少女を、彼は、十も下の女の子を見るような瞳で見つめていた。

「さつき、見ていたでしょ?」

イーブルと言つ青年が、マリに酷いことを言つていたことを思い出す。

「私・・嫌われたみたいなの・・・」

エミリアンはこの時、初めてこの娘が愛らしく感じた。包み込

みたくなる衝動に駆られる。柔らかそうな金の髪。そして惹きつける琥珀の瞳。自分も碧かつたとマリは言つたが、それの方が不自然に思えた。なぜなら、彼女の姿は、黄金でこな美しさを發揮できるような容姿だったからである。

今までの身の上を彼女は語るが、言葉半分にしか、ヒミコアンは聞いていなかつた。

愛らしい大きな瞳を曇らせるマリの姿に、ヒミコアンは心を奪われていた。

二人の空間に、突然後ろから人が現れた。

一人はそれを感じとり、振り向いた。

「ブレイン・・・」

マリが、呟く・・。信じられない者を見るかのように、彼女の瞳は驚きを表していた。

「どうしてこんなところに・・・」

「探したよ、マリ」

漆黒の青年より、少し幼くしたブレインが、マリを見つけて、静かに言つた。

「マリ、よく聞いて。兄さんは、イーブルは・・むへ、いないんだよ」

声も出ない様子のマリに、再びブレインは言つた。

「愛していたと、伝えてくれと言つて、もう兄さんはいないんだ」

「そんな、そんな馬鹿な・・。だって、今日だって・・・私、会つたのよ?」

「闇に・・闇に・・」

自分の代わりに喰われたとは、ブレインは言えなかつた。

「そして、私の髪は碧みを帯びはじめたんだ」

碧の世界にいるだけではない。確かにブレインの髪は少し碧を含んでいた。

「そんな・・・碧き五戦士・・・」

マリは呟き、氣を失つた。

エミリアンが倒れるマリを、彼女を支え、抱き上げた。

「まず、彼女を休ませよう。私はこの世界がどうなろうと知った事じゃない。だが、彼女の涙は、あまり見たくないと思つたよ」

この時ブレインは、黄金の王の存在の意味を知つた。

ブレインは、黄金の二人の姿を見て、敗北感を味わつた。エミリアンではない。イーブルでもない。それは、ブレインの中に生まれた、誰に対するものではなかつた。

自分が兄のように強ければ。自分の運命を早く知つていれば・・・。後悔と敗北感をブレインは強く感じた。だからといって、立ち止まつてはいられない。彼は、やつとの思いで、一人の後を追つた。

この時から、闇は世界を覆い始める。黄金の二人が存在するスレイダ以外、即座に闇が世界を包んだ。

各地で人々の心に闇が支配し、争いが起こる。小さな争いから、戦争へと発展して行くのは目に見えるようである。

「お父様、世界が、この美しい世界が、イーブルの愛した世界が・・

」

「うむ、わかつてあるが・・黒王も死去した今、我らがなんとかせねばならん」

まさか、我が子が黄金の女王になるとは思つていなかつた碧王は、見るからに動搖していた。

「王、闇の拠点は黒城です。我々を行かせて下さい」

カインが代表して、碧き五戦士の意志を伝える。

「このまま行つて、どうなると言つんだ?」

エミリアンの珍しい冷ややかな口調が、カインを責めるように響いた。

「それは・・わかりません。ですが、お一人には力があるはずです」「ない」

エミリアンは冷淡に答えた。

「私にはそんな力はない。期待されても、私は何もできない。もち

ろん、マリを守る力もない」

「しかし……」

カインが言い負かされるなど、珍しいことだった。沈黙が王宮を包んだ。

「ふふ・・迷うようであれば、こちらから参上してやるわ」

「何だ、この邪悪な気配はー？」

フォースが剣を抜き立ち上がる。

「何を驚いておるのだ。ぐずぐずしているようだから、こちらから来てやつたというのに」

その、声の主は……。

「イーブル！」

マリは以前の声と違うイーブルの姿があった。

「どうして・・・生きていたのね。でも、どうして、イーブルどうしてあなたが・・・」

「ふふふ・・。お前が黄金の女王か・・。なるほど、ただの小娘ではないようだ。しかし、弱い。弱すぎる」

ゆっくり、イーブルの姿が近づく。

何と美しい姿だろう。しかし、それは以前の美しさではなかつた。残忍な瞳と、不敵な笑み。それは、人としての美ではなかつた。あれほど美しい男だつたのに。正義感の強い澄んだ瞳と、涼しげな彼の口元は既に一からも残つてはいなかつた。

フォースがイーブルに向かつて、切りかかるつとする。

「やめてえ」

イーブルを庇つてマリは叫ぶが、フォースはイーブルに触れる」ともなく、地にひざを付いた。

「そんなもので、やられる私ではない

「アベル、まづはどこかに、移転してしまうのです」

カインの必死な叫びに、アベルは呪文を唱え始める。

「そんな術で、どうしようといつのだ」

その言葉と共に、アベルの呪文は書き消された。

「あなたは、あなたはイーブルでしょう?」

「マリ様、あればもうイーブル様ではあります
ピュアの叫びがマリに届いているか、判らない。

「いいや、私はイーブルだ

冷たい微笑みで、マリに近づこうとする。

「いや、来ないで・・・。目を覚まして、イーブル!」

叫んだ瞬間、マリに剣が投げられた。

一瞬の出来事だった。イーブルがマリに向かつて投げた剣は、マリを庇つたブレインに深々と刺さったのだ。

「ブレイン!」

マリは必死に、崩れるブレインを胸に抱えながら、マリは嘆いた。
「ブレイン!」・・・ごめんなさい・・わたしのせいで・・・

「小奴、邪魔をしあつて・・・

イーブルの顔が邪悪に歪んで笑みを見せた。

「イーブル、あなたの弟じゃない。ひどい、ひどすぎるわ。」

「マリ・・いいんだ。早く、兄さんを・・自由にしてやつて・・

それを言い残しブレインは息絶えた。

それから彼女は、涙を流し信じられない力を發揮した。カインとアベルの助けて、やつとの思いでイーブルと闇を封印したのだ。しかし、エミリアンには他人事でしかなかった。彼にとつて、異世界であり、自分は死んでいたのだから。

そんな彼にも、一つだけこの世界に存在しても良いと思わせる者があつた。それは自分と同じ黄金を纏うマリであつた。だがマリは、イーブルのいない世界は耐えられなかつたのだ。彼女は気力をなくし、夢の中の住人となつてしまつた。エミリアンは、マリを賢明に看病したが、ついにエミリアンを見ることはなかつた。

愛しいマリ。君が苦しむなら、この世界など無くなつてしまえばいいこと、何度思つたことだらう。だが、彼女は、この世界に帰つて

きてしまった。またヒコアンも、この異世界に入り込んでしまったのだ。

そして、再び悲劇が繰り返されるのだ。

第五章 悲しみの果てに

出会つてから、摩理に妙に冷たいブレインの姿を摩理は追つていった。

「アベル、頼む」

とても深く、青い髪のブレインがアベルに声をかけた

「了解」

円陣を描くアベルを、摩理は不思議な瞳で見つめた。

「ねえ、ピュア、アベルは何をしているの？」

「転移の円陣を描いているのですよ。アベルは、転移の円陣から、円陣へと自由に移動できるのです。だから旅をして円陣を広げていたのです」

ピュアの簡単な説明が終わる頃、アベルの転移の円陣は完成に近づきつつあつた。

「気持ちを落ちつけて、お入り下さい」

摩理はドキドキしながら、ブレインの横にさりげなく円陣に入る。ただそれだけのことが、彼女にとつて幸せだった。恋してる。その気持ちだけで、一六歳の彼女は本当に幸せになれるのだった。

だが、封印の城をして彼女は幸せな気分は保てるのだろうか。

暗黒の空に高くそびえ立つ魔の山の前に、異様な気に包まれて封印の城は存在していた。人々が長い年月、近づくことのなかつた城は荒れ果て、かつての威厳ある姿の名残さえなかつた。

「これが封印の城」

前世のブレインの生まれ育つた城を、摩理は封印の城と呼んだ。まだ、全く記憶を呼び戻していないのだから、仕方のないことだが、ブレインの心は少し痛んだ。誇り高き黒城をそう呼ばれるようになつて、もう慣れたはずなのに、マリから発せられるのは辛いようだ。

「では、行こう。城内は私が案内する」

ブレインが先頭に立ち城門をくぐる。

摩理は城内には魔物が住み憑いていたが、中は冷たい空気が流れているだけだった。

どれほど歩いただろう。扉の前にブレインが立ち止まつた。

「この部屋に、闇と通じる封印扉がある」

ブレインは思いきり扉を開けた。部屋の中は暗く何もない。ただ、正面に素晴らしい装飾の扉が重々しく存在していた。

ブレインはそれぞれの役目を確認するかのように、静かに仲間を見渡した。そして、ブレインは最後の、そしてただ一つの運命を行した。

「なんて、なんてことを・・ブレイン！」

予期せぬブレインの行動に摩理は驚き、叫び、震えた。

それほど摩理に驚愕を与えたブレインの行動とは、魔の扉に向かつて自分の手首を切り落としたのだ。鮮血が扉を彩る。真っ青な血がブレインの手首から惜しみなく流れ出て行く。

「やめて、なぜ？なぜこんな事を？なぜみんな黙っているの！」

ただ一人、事態を把握していらない摩理が、痛みに顔を歪めたブレインと、それを見つめる仲間に叫びかける。

「私の血で、この封印は破られるのだ」

「なぜ、封印を破る必要があるの」

「マリ、君が生きている間に、奴を倒さなければならない。闇が、この世界を覆う前に。いつ破られるか、いつ目覚めるかわからない今の状況を開拓しなければ、いつか闇は世界を包むだろう」

「やめて、闇が蘇るかどうかわからないのに、あなたが犠牲に成る必要はないじゃない」

悲しそうに、優しさを含んだブレインの瞳が摩理を見つめた瞬間、ブレインは自分自身の腹部に剣を突き刺した。新たに流れる血を摩理は呆然と見ることしかできなかつた。

「いやよ、なぜブレインが・・」

「我々は、世界を不安定なままには出来ないのです。闇が蘇らない

かもしれないと言つ考へに世界を賭ける訳には行かないのです

カインの言葉が摩理から言葉を奪いとつた。

「どうか早く、私の血がすべて流れ落ちる前に、早く、思い出して・

・・

懇願するブレインの姿を見て、摩理は焦つた。前世など思い出はずもない。摩理の心は疑問ばかりだから。

なぜ、あなたが犠牲にならなければならない。

なぜ、私がこんな気持ちにならなければならぬ。

なぜ、愛するあなたを失なわなければならない。

そう思い、苦しむブレインの姿を見たとき、強いデジャブに襲われた。この気持ちは、過去生きてきた十六年間のものではない。では、いつこんな悲しい思いをしたのだろうか。その瞬間、摩理に押し寄せる大量の記憶の波。なつかしいと思うのもつかの間、急激に深い悲しみと苦しみが流れ込んでくる。この気持ちは、これはイーブルを失ったときの感情？

田の前ではブレインの血が摩理を苦しめる。ついにブレインは、その精悍な体躯を支えきれなくなり、流れ出る血の海に身を落とした。カインが急いで抱き上げるが、ブレインの瞳は深く閉じられていた。

「いやあー」

泣き叫んでも、容赦なく記憶は蘇り、ブレインの血は流れる。記憶と共に体内から溢れ出す力。抑えきれない、制御できない感情。

彼女の体は黄金の髪と瞳を更に輝かせ、肌は真珠色に光っていた。

そして、碧い涙が一筋、彼女の頬を伝う。

「いやよ、ブレイン田を覚まして・

遠い昔、共に遊んだブレイン。一六年生きてきた中で初めて愛した人。そのブレインが今、自分の田の前で命を絶とうとしている。摩理の体が自然に彼に近寄る。

「やつと・・覚醒したんだね。その悲しみと苦しみを恐れて、あなたは過去を思い出せなかつたんだろ？。もう、何も恐れることはな

いんだ。私は、これでやっと自由になれる。兄も解放して・・・
ガクンと力つきたとき、封印は開かれた。

「ブレイン」

共に、イーブルに憧れて、共に遊んだブレイン。今、ブレインを好きな気持ちはイーブルに似ているとかじやない。寂しげな優しい瞳に恋をしたのだ。摩理としてブレインを好きになつたのだ。ずっと、マリとしてしか自分を見てくれなかつたブレイン。自分の死を知つていたブレイン。闇に飲み込まれそうになりながら、ずっと死を待つっていた。

摩理の悲しみが、この空間を支配した。圧倒的な悲しみを全員が感じる。皆、ブレインの死を覚悟していたはずなのに、摩理の悲しみに引き込まれそうになる。悲しみに、ピュアさえも心を壊されそうになる。自分たちの使命も忘れてしまいそうになつた瞬間、すさまじいほど闇のエネルギーが扉から放たれた。

「我、復活したり。この世を支配するために復活したり。この小娘のために、永い間、こんなちっぽけな扉の中に閉じこめられたものよ」

低い地の底から呻くような声と、信じられないほどの憎悪。それを放つ姿は、前世の摩理が愛した男。摩理を愛したイーブルの姿であった。

「こないで、こないでイーブル。また、あなたを苦しめてしまう。もういやなの。やつと巡り会えたのに。ブレインは死んでしまつたわ。その上にあなたまで失うなんて」

「目覚めた時から、我の好きな悲しみの感情が充満しているではないか」

楽しそうにイーブルが発する言葉は、以前の彼からは考えられない言葉ばかりである。誇り高かつた彼は、世界の平和と幸せのみに生きていたのに。

「イーブル・・」

「摩理様、あれは、もうイーブル様ではない。目を覚ますのです」

カインが、ブレインを抱きながら叫ぶが、悲しみにくれている摩理に届かない。

「摩理様、早く力を解放して下さい」

アベルが代わりに摩理に近づこうとした瞬間、雷が彼女の足を止めた。

「邪魔は許さぬ。この女は我のもの。なぜ、そんなに悲しんでいるのじゃ？」

偽りの優しさと知りながら、摩理は答える。

「ブレインが死にそうなのよ・・・イーブル。あなたの大切な弟が。あなたはどうして平氣でいられるの？」

涙が溢れて止まらない。摩理は泣き声で訴える。

「ほう、小奴の弟がのう。それは大変じやのう。我が楽にしてやろう」

そう言つた刹那、ブレインに心臓に剣を投げつけた。カインが底う間もなく、深々と剣はブレインを心臓を貫いたのだ。瞬間的に、摩理とピュアは叫んだ。言葉にならない叫びを・・・。

「ふつ。これで心配事もなくなつたであらう。思いぞんぶん悲しむが良い。そのように怯えた黄金では、我に勝てそうもないから」高らかな笑いが、空間を埋め尽くす。

「ひどい、ひどすぎる」

「これが、力だ。お前のように感情を持つているから、怯えるのだ。そうそう、このイーブルとて同じ事。強靭な心を持つていながら、自分から犠牲になったのだから。小奴の心の悲鳴を魚に、随分、楽しませてもらつておる。感謝せねばなるまいのう」

摩理の高ぶる感情が、あたりを黄金に包む。

「許せない。人は感情を持つているからこそ、人なのに・・・それを、それを弄ぶなんて！許せない！」

「な、なんだ。なんだこの力は？」

闇の驚愕の声を最後に、摩理の力は最高に達した。目映い金。黄金の光と熱量。すべてを溶かしてしまうかのような光。狂気が摩理を

包む。

「このままでは、全てを熱と変えてしまう！カイン」
今まで見守っていたエミリアンが、カインを呼ぶが、横に首を振つた。

「無理です。摩理様の力は誰にも止めることは出来ません」
「このままでは、摩理以外、闇と共に我々も助からないぞ」「では、摩理様を殺して下さい。それが出来なければ、闇と共に滅びるのです」

カインの感情のない声を、エミリアンは聞いたが、返事は出来なかつた。摩理を殺すことなど出来ない。しかし、我々が死ねば彼女は一人きり・・・。エミリアンは決心できなかつた。

「摩理」

呼んでも彼女の力と感情は、彼女自身の元から離れてしまつてゐる。

「気付いてくれ摩理」

悲壯な叫びは空を切り、虚しく響くだけであつた。

「摩理、マリ、もういいんだ」

その時、優しい声が摩理を呼んだ。誰もが信じられない者の声だつた。

「イーブル、イーブル、帰ってきたのね」

懐かしい、優しい声で彼女は気付いた。自分の感情を自分の中にとりもどした。しかし、その瞬間に目にしたのはイーブルの倒れている姿だつた。

彼女はそれを見るなり駆け出した。その愛しい人を胸に抱き、再会を果たしたのだ。

「ありがとう、マリ。やっと眠ることができる」

イーブルの安らかな笑顔。

「ごめんなさい。私が私が力を制御できたら、あなたまで・・・こんな」

涙で声にならないマリ。摩理でもマリとも言えない彼女の姿を、愛しそうに彼は見た。

「それは違う。ブレインが死ぬのも、私が死ぬのも運命だったんだ。君のせいじゃない。黒の民としてこの世界のために命を失うんだ。悲しい事じやない。それより君には感謝さえしている。私はやっと自由になれるんだ」

「いやよ。また、あなたを失うなんて」

「君のために多くの人々が選ばれ、生まれた。私もその一人だ。でも、君と共に生きて行くことは出来そうもないけれど、私は君のために生まれて、君のために死んで行くことを誇りに思つてゐる」

苦しそうなイーブルは、やつとの思いでマリに告げる。

イーブルが苦しそうに顔を歪めるのは、足の先から、碧い澄んだ水に溶け始めていたからであつた。

「もう時間がない。これだけは、なにも言わずに聞いておくれ。闇の中での君のことだけを考えていた。私が死んでも君が悲しまないようになると。。そして、なぜ黄金の王が男女一人なのかも考えた。エミリアンは君と生きて行くためにいるんだ。君を支えるために生まってきたんだ。ずっと君を守ると約束をした私の代わりに。約束を守れない私を許しておくれ

静かに、静かに目を閉じ終わりを告げる。深い愛をマリに見せつけて、イーブルの体は碧く澄んだ水へと変化を遂げて行く。マリの溢れる涙が、イーブルの体に落ちる。そこからまた、イーブルの体は水に変化していく。二人はもう相容れない体に、世界になつているのだ。

マリは涙をふき取り、必死にイーブルを助けようとするが、足からどんどん水に変化する。その水が、ブレインの碧い血と交わり、大量の水が溢れだした。

「摩理、離れるんだ！水が襲つてくる。早く」
物静かなエミリアンが叫ぶ！

「いやよー、私もここで一緒に死ぬの。私も共に行くのよ。また昔の三人に戻るのよ」

Hミリアンを振り払つたマリは拒絕した。世界を、仲間を、そ

して未来までも彼女は拒絶したのだ。

「ピュア、摩理を眠らせるんだ。フォース、摩理を頼む。アベル、カイン道を開いてくれ。脱出するぞ」

今までの姿が嘘のように、エミリアンは仲間達に指示を与えた。死んだブレインのように、全員を誘導する。その姿を、カインは落ちついた瞳で見た後、溶けていくブレインにそっと語りかけた。

「安心して御眠りなさい。もう一度とこのような悲劇は起こりはない。あのエミリアン様が、一度と摩理様を悲しませないように…。さようなら、ブレイン」

渦巻く激流の中、六人は脱出した。アベルとカインの力も大きかつたが、エミリアンの決断の早さが、仲間を助けたのだ。

封印の城を脱出した六人の前には、城の姿ではなく、湖が整然と碧き光を放ち、魔の山を照らしていた。

「封印の城は、この碧き湖の誕生と共に消滅しました。魔の山を照らすこの湖で、人々の心から不安と恐怖はなくなり、闇は、この世界から姿を消すのです。不安から恐怖は生まれ、恐怖から争いは生まれる。不安が無くなり平和が訪れるのです」

カインが未来を預言するかのように呟いた。

「さあ、スレイダに帰ろう。アベル頼むよ」

エミリアンの声に「了解」の言葉が響き、六人は湖の前から姿を消した。新しい時が生まれたのだ。

「いやよ、私も一緒に死にたかったのに」

スレイダのブレインの屋敷に帰り、目覚めた摩理は半狂乱に喚き散らした。

「なぜ？なぜ愛する人を失つてまで生きて行かなければならないの？なぜ、愛する人の命を奪つてまで、私は生きているの？生きてることが間違っているのよ」

悲しみを隠そうともせずに、摩理は悲哀の言葉をつづった。この悲しみの前に、どんな人間が普通でいられるだろう。愛しい人を一人

もなくした摩理に、どうして悲しむなと言えるだろう。重い前世を思い出し、たつた一六歳で、初めて好きになつた人の命を失い、次に前世に愛した人とも永遠の別れを強いられた彼女に、どうして泣くなと言えるだろう。

彼女を見つめるエミリアンとピュアは言葉をなくしていた。

「死にたいの」

摩理がエミリアンとピュアに願つような瞳で訴える。

「摩理、聞いてくれ」

エミリアンはマリの華奢な肩をつかんだ。

「僕には何の力もない。もし、僕の瞳が琥珀だつたら、僕が彼らの命を奪つただろう。そして、摩理も恨む相手もできて、こんなにも自分を責めなくてもいいだろう。しかし、僕の瞳は碧い。何の力も持たない。君を愛することしかできないんだ。共に生きて行くことしかできないんだ」

遠くを見つめる摩理に、エミリアンの言葉が届いているかさえ判らなかつた。

「彼らは黒の民として、世界のために死んでいった。僕にはどうてい出來ないことだ。僕なら、君を連れてどこかに逃げるだろう。しかし、君の愛した男たちは、戦つたんだ。信念を貫き、死んだんだ」「いや、もうやめて」

「いいや、やめない。君が死んだら、何のために彼らは戦つたんだ。何のために死んでいったんだ。君が彼らの守つた世界を維持しなくて、誰が維持して行くんだ。だから、死にたいなんて言わないでくれ」

摩理は強く、瞼を閉じて耳をふさいだ。瞳の奥からイーブルを、ブルレインを捜すように。

幼い誓いを思い出す。彼らが自分してくれたこと。彼らが話していたことを思い出す。黒の民として誇りを持っていた。その姿を愛していた事を思い出す。

「私に、私なんかに・・・無理よ・・・私は唯の女の子よ。何故?」

「何故、私なの？」

「君がイーブルを、ブレインを愛したからだよ。君が意志を受け継ぐんだ」

「意志・・・を・・・」

不思議そうに、どこか落ちついた声で、摩理は呟いた。

「そうだ！彼らの意志を受け継ぐんだよ」

懇願するエミリアンの姿を、じっと見つめた。

「なぜ？なぜあなたは、ここまでして私を心配してくれるの？前世でも、私はあなたに酷いことをしたわ？悲しみに明け暮れた私は、あなただけに碧の国を任せきりにして・・それなのに・・なぜ？」

「マリが好きで、そして、彼らの生き方に憧れている・・・と思う。羨ましく思う・・・僕が彼らの身代わりになれるなら、僕は喜んで身代わりになつただろう。君の身代わりになれるなら、君の悲しみを受けとめよう。しかし、僕には君を想うことしか出来ないんだ」切実な願いが摩理の中に流れ込む。酷く悲しい、そして暖かなエミリアンの心が解る。

彼は、前世での過ちを繰り返したくはないのだった。死んだように生きた、彼女を見たくないのだ。マリのように摩理を苦しめたくない。

それは、前世のエミリアンと現在の彼が、共通して強く思つ」とだつた。

「わかつた」

短く言い切つた彼女の瞳には、先程までの絶望は消えていた。決意と悲しみを秘めた、その姿に、エミリアンは美しいと感じた。真に綺麗だと思った。

「二人が守ろうとした世界を、私が守らなくては・・ならないのね」「そうだ、そして子を生むんだ。その子がまた世界を照らし輝かせ、世界を平安の光で包むんだ。もし、闇に侵されそうになつても、ピュア達の子が、カイン達の子孫がきっと助けてくれる」力強く、エミリアンは言いつた。

「ええ、ええそうね」

摩理は目が覚めたように、しつかりと頷いた。何度も何度も、涙を流し頷いた。

その姿を見ていたピュアが後でフォースに語っていた。

エミリアン様は可哀想。死んだ人は美しい思い出となつて胸に刻み込まれて行くのに、エミリアン様は、その悲しみと、思い出を背負つた摩理様と共に生きて行かなければならないなんて。エミリアン様の戦いは、今始まつたのね。本当に可哀想だと呟いていた。

一年後・碧の国、建国。首都をスレイダに置き、碧元年とする。黄金の王と女王の元、摂政力イン、神官長アベル、將軍フォース。フォースの妻ピュアは女王の筆頭侍従として王宮は華やいだと言う。碧四年、双子の王子誕生。イーブルとブレインと名付けられた。イーブルの瞳は琥珀。ブレインの瞳は碧。それから碧の国では黄金の王が何代も続き、平安を維持した。

いつしか黄金の若者蘇り

碧の五戦士転生す

再び闇を葬らん

魔の山の麓に碧く光る湖ありて

この世を平安に導かん

悲劇と正義と愛の末

その湖 碧の涙と呼ばれたり

END

第五章 悲しみの果てに（後書き）

初めて書いた少し長めの小説でした。

もう10年以上前に書いたので・・・実際自分でもストーリーを忘
れていましたが、読んで思い出しました。

さすがに懐かしいところより、恥ずかしい・・・。

「感想」意見いただると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127d/>

碧の国

2010年11月14日10時52分発行